

方向

第一一二号 一九九〇年三月三〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人、大塚五朗 (三)

1990.3.6. 原田憲雄

青年時代

一九一一年 五郎、十四歳。

四月、福島県伊達郡川俣町川俣尋常高等小学校の高等科に入学する。長兄広通が同町に在住したためであろう。萩原松子(後の夫人)も同じ小学校高等科に入学。松子の父喜惣次が一九〇八年に伊達郡飯坂村小学校校長として転任移住していたが、同村には高等小学校がないので、約三キロ西南の川俣尋常高等小学校にはいった。男女は組分けされ、松子は五郎と話しをしたこともなかった。

一九一二年 五郎、十五歳。

四月、たぶん長兄広通の転任移住にともない、福島市の高等小学校に転学。

この年、一月一日、中華民国成立、二月一二日、清朝滅亡。四月一三日、石川啄木没。七月三〇日、明治が終わり、大正となる。

一九一四年 十七歳。

四月、福島県立師範学校に入学。萩原松子も、同時に同校に入学した。ここでも男女は組分けされ、男生徒と女生徒が話しあうことはほとんどなかった。

歌集『山原』の「巻末手記」に

福島在住時代——私にとつて第二の故郷ともいふべき福島在住時代は何かにつけて一番懐かしい時代である。という。『山原』に収める作品は一九一八年のものが最初だが、短歌を作り、小説を読みはじめるのは師範時代からであろう。一九一三年には、斎藤彦吉の『赤光』刊行、北原白秋の巡礼詩社が創立され、一九一四年には、芥川龍之介・菊池寛らが『新思潮』を創刊し、相馬御風・中山晋平の「カチユウシヤの唄」が爆発的に流行し、夏目漱石の『こころ』が出たのだから、なお後に五郎が同人となる歌誌『水葵』は、この年四月、尾上柴舟（八郎）らによって創刊された。

一九一五年 五郎、十八歳。

この年、母もよ死去。法名、法徳院妙代日広大姉。

一九一六年 五郎、十九歳。

三月、修学旅行で奈良・京都などにゆく。そのときのことを「淡雪」（『続風土記』二四二頁）に、

東北の一中学生であつた私は修学旅行で奈良へ来た。今でも先生につられてぞろぞろ歩いてゐる修学旅行隊を見ると、とても懐しいのだが、そのうちでも一番垢ぬけしないやうな連中から、もしも東北弁らしい訛の一かけでも聞かうものなら、それこそ——これだ、これだ——とばかりその昔の自分の姿を見つけたやうに、後について行きたくなる。

奈良ほどの辺だつたか、名前だけは今でも「紀の国屋」と覚えてゐるが、何しろ旅もあと京都を残すだけ

の終りに近かつたし、それに多少無頼を氣取つた仲間の二三と、なめた名物のあられ酒に酔つぱらつて、部屋の片隅にもぐつて寝たのはよいが、とうとう翌朝は寝坊してしまつて、奈良見物はおいてけぼりを喰はされた。それでもいい先生だつた。

「春日さんのところさ案内人待たせておくぞ。」

と。今はどうしちやつたか更に消息も聞かないが、Yといふ仲間を二人、それでも興福寺や猿沢の池を見て春日神社のところへきたら案内人が待つてゐて案内するといふ。何処をどう案内されたかは忘れてしまつたが、嫩草山の麓に出て来て、丁度三月の山の芝も齊々と芽を揃へようとする頃のなだらかさ、あの頂上から滑つたらどんなに氣持がよいだらうと見惚れてゐた私の袖をひつばつて、

「まあこの家に入つてごらんなきい。御仲間も皆見せて貰ひましたよ。」

と引張り込まれたのが、今思へばこの×××××であつたのだ。奥まつたうす暗いところの棚には、ぎらりと抜いた幾本かの刀が架け並べられてあつて、そのわきに火鉢のやうに坐つてゐた男が、私達が入つて行くとなんか何かに灯をつけて、すらりと抜いた長いやつを手にかきしながら、

「これは手前どもの祖先が鍛へた×××××の名刀です。銘はこの通り。」

と束(つか)を払つて鼻の脂か何かつめて見せてくれたものだ。それはよかつたのだがきて記念に何か一つ買つて行けといふ。鉞・小刀・鉋丁・切出し・ナイフ……。私の目はさつきから一本の短刀にとまつて離れない。それをみてとつたその男は、

「この短刀の切味はまた格別です。何でしたら一つ試してみませうか。」

さういふや否や、台の上のにのせた文久銭をはつしとばかり真二つに切つてみせた。かうなるともう矢も盾もたまらない。残り少ない財布の殆ど底を叩くやうにして買つて飛び出した――が、二三丁も来ないうちに強く悔いが湧いてきた。これから京都・金沢・新潟と四五日はある旅の、四五十銭の小遣では弁当も買へやしない。何べん戻つて行つて、三十銭の小刀と代へて貰はうかと思つたかしのれないが、そこはお上りさんの見栄も手伝つてそれもならず、後悔が心細さに、心細さが憂鬱に、憂鬱が物悲しさに、その日の夕方京都に入つて、三条小橋の布袋屋に着いた頃は全く傍で見える目も気の毒な位悄気てしまつた。宿屋に着くや否や土産物売りがずらりと土産物を並べて、誰も彼も鞆に入りきれない程買ひ込むのを、半ば羨しく半ば恨めしく眺めてゐたものだ。夕飯後の散歩など新京極どころか、十時の点呼も待たず、短刀を大事に抱いたまま寝てしまつたが、翌朝目を覚ましてみたら、おお京は三月の雪であつた。私は宿屋の下駄をつつかけるやうにして三条大橋の上に出てみた。

まだ芽が出てそれ程にもならない橋の袂の柳に降りかかつては消える雪のあたたかさ。いつの頃から降り出したのか、橋の上にうつすらと積つた雪を蹴るやうにして行く人の、塗り下駄の赤い歯がとてもなまめかしかつた。雪国に生まれて雪国で育つて、雪には馴れてゐる私も、こんなに身に沁みる雪の美しさははじめて見た。比叡山も東山も鴨川もない、わくで載つたやうな三条の橋の雪であつたのだが今も心の額にきちんとはまつてぬけようとしめない。

どうせ降つたところで夕方までは保たない三月の雪のはかなさは、どこか京都のもつ美しさと同通うたところがある。詩と夢ではなくまれた京都の美しさから、脆さ、はかなさ、かそけさを取り除いたら後に何が残るであらうか。

その時私の若い魂は本当の京都を掘んだやうな気がしたが、その後京都に住むやうになつてからも、それが癖になつてしまつて、私はいつも京都の街から空から、このはかない美しさばかりを嗅ぎ出さうとしてゐるやうだ。事実、短刀と淡雪——そこに何のかかはりも無ささうなのだが、この財布を叩いて買った短刀を思ふと何故かほのぼのと私の心に淡雪が降り、三月の雪を見ると短刀を思ひ出す。或はどこか夢のやうなはかなさでつながつてゐるところがあるのかもしれない。

一九一八年 五郎、二十一歳。

三月、福島県立師範学校卒業。四月、同県石城郡上遠野村小学校に訓導として勤務。「山原」「巻末手記」に、県の師範学校を卒業すると直ちに若い小学校教師として石城郡上遠野といふ山村に赴任を命ぜられた。上遠野は石城の平から山より五里も入つた所で石炭と馬の産地である。そんな山の中に赴任させられるといふ事は実に意外な事で、その当時既に私には妻となるべき者があつたのであるが、その者と四十里の山河を隔てて住まなければならぬ傷心の時代であつた。私は病氣勝な体と寂しい心を抱き乍ら、その山村に二年あつた。

「妻となるべき者」は、萩原松子で、五郎と同時に卒業、同県伊達郡川俣尋常高等小学校に勤務していた。

前号の「春夢子」などに関する拙稿に対し、多くのお教えをいただいた。これを記して感謝します。

まず、拙稿「中野逍遙」執筆から今日までを「二十五年」と記したのは「十五年」の誤りであることを、高橋達明・二宮俊博の両氏が示された。次に坪井蜂音庵の「蜂音」を「ぶ」と読むのは万葉云々の「馬声（イ）蜂音（ブ）石花（セ）蜘蛛（クモ）荒（アル）鹿（カ）」に拠るだろうと、原田昌雄・若林芳樹の両氏が示された。

若林・二宮両氏の手紙はともに三月九日付で、若林氏には坪井蜂音庵・春夢子父娘についてのさらに詳しい資料が、二宮氏には、氏の白居易についての論文二篇と、中野逍遙に関する他の人の文献など四点の複写が同封され、いずれも未見のもので、たいへんありがたかった。若林氏の手紙と資料を許しを得て節略紹介し、のちに二宮氏恵投の文献にも触れたい。若林氏の手紙は、

「方向」第一一一号ありがとうございました。一部は新宮市立図書館に呈上し、御文章のことについて説明しました。郷土に関係があるので喜ばれました。

といい、その図書館の人が示された坪井関係資料によると、

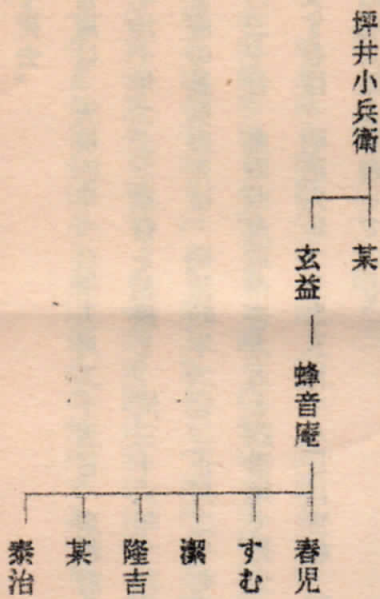
蜂音庵の長女の本名は「スミ」でなく「すむ」であることが判りましたので 訂正して おわび申し上げます。

「すむ」は「春夢」に発音が一層近くなりました。

このあと「蛇足ですが」として次の二条が記される。その第一条は前記と重複するが、

蜂音庵の蜂音は 万葉卷十二、三九二、垂乳根之（たらちねの）母我養蚕乃（ははがかふこの）眉隠（まゆごもり）馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿（いぶせくもあるか）異母二不相而（いもにあはずて）の戯書といわれる用字法の蜂音（ぶ）と存じます。

蛇足第二、九十歳になる義兄前川蒼刃の話によると、「新宮の殿様水野公が家来に名前をつけた。その名前は、深田底内、三毛猫三、深田耕、矢田鴉、安部幸兵衛などで、殿様が直々につけてくれた名前だというので、これらの人々は珍名族として人々から羨ましがられた。」とのこと。蜂音庵は珍名族の一員であつたという記録はありませんが、ひよっとしたら側近の医師にふさわしい名であつたのかも知れません。手紙は以上。同封された資料により坪井家の系図を作り、その一々を説明する。



坪井家は和歌山県東牟婁郡新宮七六七八番地を本籍とし、東牟婁郡新宮は後に新宮市新宮と変更。

玄益は小兵衛の二男で、文化十年(一八三三)五月五日に生れ、明治二十四年(一九〇一)一月七日、東京市本郷区本所石原町で死去。

蜂音庵は、天保四年(一八三三)五月二十五日、京都府多喜郡篠山の大道寺玄道の二男として生れ、玄益の養子となり、明治十年(一八七七)家督を相続し、同三十六年(一九〇三)隠居し、同三十九年(一九〇六)八月二十二日に死去。

蜂音庵の長男春児は、明治四年(一八七〇)正月二十七日に生れ、同三十六年(一九〇三)家督相続し、昭和三十年(一九五五)十二月三十日、鳥取県鳥取市吉方五七四番地で死去。

長女すむは、明治六年(一八七三)五月十八日に生れ、同三十四(一九〇二)年四月四日、東京市牛込区神楽町二丁目四番地の宮崎太郎と結婚している。

二男潔は、明治八年(一八七五)二月十五日に生れ、同二十七年(一九〇四)東京市本郷区本所石原町の柳田はま養女シゲの婿養子となり、同三十年(一九〇七)柳田はまの養子を離縁し、後に分家して鎌倉に住む。

三男隆吉は、明治十一年(一八七六)二月十三日に生れ、同二十一年(一九〇八)新宮の相須勝次郎の養子となり、同二十六年(一九一三)離縁し、昭和二十五年(一九五〇)二月二十一日、東京都北多摩郡保谷町大字上保谷二二九番地で死去。

五男泰治は、明治十九年(一八八六)九月二十一日に生れ、のち分家し大阪府に住んでいる。

以上が若林氏の手紙に同封された坪井家資料の大要だが、蜂音庵の実父大道寺玄道と、養父坪井玄益とが、その名にとともに「玄」字を持つのは、ふたりが玄某なる医師の同門の弟子だったからではなからうか。玄益の死んだ東京の本所石原町は、蜂音庵の二男潔の養子先の住所と同じである。これはいかなる事情によるのだろうか。

さて『逍遙遺稿』に返って、「春夢」の名のみえる正編の「春夢女史に別る、二首」(岩波本、四頁)が明治二十五年(二八三)、「紀州に遊び、坪井氏に投じ、徐福の墓を訪ひ、那智の瀑を観る。春夢子と共にす。特に発せむとして、賦して坪井氏に贈る。」(同、四、一頁)が翌二十六年(二八四)の八月の末から九月にかけてのものである。外編の「紀州なる春夢子のもとにつかはしける」という題の和歌六首は、日付はないが二十六年の十月前後の作であろう。明治二十五年は、逍遙は数えどして二十六歳、坪井蜂音庵は六十歳、すむは二十歳。同二十七年(二八四)十一月十六日、逍遙は二十八歳で死に、それから七年後の三十四年(二九二)に、すむは結婚する。その間に、若林氏のいう「甲府の女学校に教鞭をとられた」時期が入るのであるが、三十四年は、すむは、すでに二十九歳、当時の女性としてははなはだ晩婚である。これはどのような事情によるのであろうか。

『遺稿』には収められない未完の小説『慈涙余滴』には、「逍遙子」が神戸から京都への車中で出会った「老婦」や「少女」との長い対話が含まれ、逍遙の思想を見る上で重要なものらしい。二宮氏恵投の箕輪英雄「中野逍遙論」はこれを主題とし、引用も多いので、ここでの参考としよう。箕輪氏はいう。

彼(逍遙)はその(『慈涙余滴』の)副主人公とも言うべき、また唯一の仮構の人物とも思われる「老婦」や「少女」の名を最後まで明らかにしない。おそらく逍遙にとって「老婦」と「少女」とは、自身の描いていた夢(もしくは理想)を語るための一種の装置にすぎないのだ。「少女」の言う「学バント飲セバ君ソレ大成ヲ図レ」、あるいは「老婦」の言う「子ハ則チ若冠ノ青衿前途任多シ勉メザル可ラザル也」と言う言葉はすでにその一端を明らかにしている。

この「老婦」が、明治になってからの世の中の「道義」の衰えを嘆くのに対し、「逍遙子」は政府の開明政策を支持し、「憂フル勿レ」「凄思スル勿レ」と繰り返す。そのことを指摘したのち、箕輪氏は、

逍遙が「老婦」を通じて語った夢が経世の志であれば、彼が「少女」に托したのは恋愛に対する憧憬である。「中略」逍遙は自身の理想をひとつの「浪漫」として求めた。だからこそ彼は『慈涙余滴』において、経世の志には「道徳」をその中心的モチーフとし、恋愛の描き方には精神性を強調する。その恋愛の精神性は、「老婦」の死後、「逍遙子」と「少女」との交情を綴った場面によく現われている。

といい、『慈涙余滴』の文を引く。

既ニシテ日諸月居陽暉日ニ長シ女ガ愁眉漸ク開ク乃チ書ヲ講ズルコト初ノ如シ。逍遙子モ亦学程ノ開ヲ以テ之ヲ訪フ者猶老婦人世ニ在ル時ノ如シ。相逢ヘバ兄弟ノ情ニ擬シ見ザルモ亦分身ノ肢ヲ感ジ窺究ノ姿ヲ憐テ淫セザルノ色ニ慕ヒ淡ナルガ如クシテ濃ナル交甚ダ深ケレドモ溺レザルノ情於是乎漸ク他日ヨリモ密ナリ。但老婦一近少女ノ気性頓ニ変ジ溫柔従和ノ質漸ク進取剛健ノ風ヲ帯ビ秀慧機敏ノ才発シテ精確車牢ノ節ヲ見ル。且ツ西人ノ門ニ遊テ西方ノ書ヲ読ミ西人ノ風ニ感接セシヨリ独立ノ操敢為ノ氣浩蕩トシテ女史ノ胸臆ヲ主トスル者ニ似タリ矣。(下略)

ここに描かれる「女史」の姿は若林氏の伝える「若くして上京、外人について英語を学び、のち甲府の女学校に教鞭をとられた」春夢子・坪井すむを彷彿させる。『慈涙余滴』は明治十九年から執筆されたようだが、当時逍遙は二十歳、すむは十四歳。以後何年までの稿を含むのかしらぬが、右文は三、四年後のように感んぜられる。

若林氏の示された資料は、すむの母と祖母については何も語らぬが、祖父の玄益が、明治二十四年に東京の本所石原町で死に、弟の潔が同二十七年に同じ所の柳田家に養子となる。その事情も分からぬが、推測の余地がないではない。玄益の妻の実家が柳田で、甥にあたる当主が死に、未亡人はまが遺児を抱えて困っていたとすれば、すでに隠居だった玄益が妻とそこにゆき、遺児を後見して柳田家の再興を計ったと考えても、明治の世にはよくあった例ではないか。すむが東京遊学の際そこに寄宿し、車中談話の縁で祖母が中野逍遙をすむの漢学の教師として招いたとしても不思議ではない。柳田の遺児が夭折したとすれば、養女を設けて近縁の男子とめあわせ養子とする話は、これもまた珍しくない。後の離縁は、その結合に縁がうすかったということであろう。

箕輪氏は『滋涙余瀆』の「老婦」「少女」を「夢を語るための装置にすぎない」仮構と推測されたが、「少女」に春夢子を当てうるなら、「老婦」にも春夢子の祖母を当てる可能性が出てきたといえよう。さきに春夢子は伝を立てるに値する女性だろうといったが、中野逍遙がおのれの政治思想を語る相手として選んだひとならば、春夢子の祖母もまた伝を記すに値する婦人ではないか。

評論には、作品・事実の堆積を眼前にして価値の測定に励むものと、大胆に作業仮説を立てて研究方向を探りながら事実を求め作品を解釈し、事実や解釈と突き合わせて食い違えば、さらに仮説を設定して前進する方法がある。箕輪氏の論は後者の優れたものである。若林・二宮両氏の与えられた資料・文献によっていまわたしの提出する推測も、与えられた事実以外は仮説にすぎない。わたしはおのれの意見を固執しない。すぐれた詩人中野逍遙と、かれと交渉してやはりすぐれた女性たちの姿が、いっそう明らかになることを念願するだけである。

鹿の車、羊の車、牛の車を上げよう、といって子どもたちを燃える家から誘い出しておきながら、無事に出てきた子どもたちに、一様に大きな牛の車を与えた父親は「嘘つき」だろうか、という釈尊の問いに対し、シャーリプトラが答えるところから、この回は始まる。

3-17. シャーリプトラは答えた——そうではありません、世尊よ、そうではありません、スガタよ、とにかく、世尊よ、その人は嘘つきではありません、その人は巧みな方便で、息子たちをその家から導きだし、命を救ったのだという理由で。なぜなら、かれらは自分の命をとりとめたから、世尊よ、すべてのおもちやも得られるのです。またたとえ、世尊よ、その人がかれらに車を一つも与えなかったところで、それでも、世尊よ、その人は嘘つきではありません。なぜなら、その人は初めに「巧みな方便で、わたしはこの子どもたちを大きな苦惱の塊から解放しよう」と考えたのですから。ですから、世尊よ、その人は嘘つきではありません。しかもその人は土蔵や穀倉をもっていることを考え、子どもたちをかわいく思っで、かれらをなだめて、同じ形の乗物、すなわち大乘を与えたのです。決して、あの人は、世尊よ、嘘つきではありません。

sāriputra āha / na hy elad bhagavan na hy elat sugata / anenaiva tāvad bhagavan kārāṇena sa puruṣo na mṛsā-vādī bhaved yat lena puruṣeṇopāya-kaṅśalyena te dāraḥās lasnād ādīpīṅś sṛbhān

niskāsītā jīvitena cābhicchādītāh / tat kasya hetoh / ātmabhāva-pratīlabhenaiva bhagavan sar-
 va-kriḍanakāni labdhāni bhavanti / yadi api tāvad bhagavan sa puruṣas teṣāṃ kuṃārakānāṃ eka-
 raḥam api na dadyāt tathā'pi tāvad bhagavan sa puruṣo na mṛsā-vādī bhavet / tat kasya hetoh /
 tathā hi bhagavaṃs tena puruṣeṇa pūrvaṃ evaivaṃ anuvicintāṃ upāya-kausalayenāham imān kuṃārakā-
 ṃs tasmān mahato duḥkha-skandhāt parimocayisyānti / anenāpi bhagavan paryāyeṇa tasya puruṣasya
 na mṛsā-vādo bhavet / kaḥ punar vādo yat tena puruṣeṇa prabhūta-kośa-kośhāgāraṃ astīti kṛtvā
 putra-priyatām eva manyamāṇena ślāghamāṇenaika-varṇāny eka-yānāni datvāni yad uta mahā-yānāni/
 nāsti bhagavaṃs tasya puruṣasya mṛsā-vādah ||

3-18. そう言われて、世尊は、シャーリプトラにこう語った—— そうだ、そうだ、シャーリプトラよ、そのと
 おりだ、シャーリプトラよ、あなたの言ったとおりだ、シャーリプトラよ、如来・尊敬されるべき・正し
 く覚ったひとは、すべての恐れを除き、すべての障害・疲労・心配・苦惱・憂愁から、また無知・無明・
 暗黒・蒙昧のヴェールから、すべて、あらゆる面で、完全に離れている。如来は知識と力と自信と特質と、
 仏の法をそなえ、神力によって非常な力を持ち、世界の父であり、大いなる巧みな方便と最高の知識の完
 成に達した、大慈悲のひと、厭きることなく他の幸福を願い、共感するひとである。如来は、大きな苦惱
 と憂愁の塊によって燃え屋根も底も朽ち古びた家のような三界に現れる。それは生・老・病・死・悲哀・
 愁嘆・苦惱・憂愁・惑乱のなかで無知・無明・暗黒・蒙昧のヴェールのうちに安住する衆生を、愛欲・憎

悪・愚痴から解放するためであり、無上の正しい覺りに導きいれるためである。如来はあらわれるとこのように見る「衆生は、生・老・病・死・悲哀・愁嘆・苦惱・憂愁・惑乱によって焼かれ、煮られ、熱せられ、焦がされる。またかれらは享樂のため、愛欲を因縁として、種々多数の苦惱にぶつかる。現世で貪り求め、蓄財しようとするために、来世では地獄・畜生・餓鬼の世界で種々の多数の苦惱にぶつかるだろう。神々となり、人間となっても、貧乏であり、好かぬものとは結びつけられ、好きなものとは離されるといふ苦惱にぶつかるのだ。そのような苦惱の塊のなかをめぐりながら、遊びたわむれ、喜び、楽しむ。驚きもせず、恐れもせず、慌てもせず、覺らず、感せず、身震いもせず、逃げ出すことを求めもせず、燃える家のような三界で楽しみ、あちらこちらに走りまわり、あの大きな苦惱の塊にうちのめされながら、苦惱とも感せず、思いもしない。」と。

evam ukle bhagavān āyusmantam śārīputram etad avocāt / sādhu sādhu śārīputra/ evam etad chārī-
putra / evam etad yathā vadasi / evam eva śārīputra tathāgato 'rhan samyak-sambuddhah sarva-bh-
aya viniṣṭāṅ sarvopadravopāyāsopasarga-duḥkha-daurmanasyāvīdyā'ndhakāra-tamas-timira-patala-
paryavānābhyaḥ sarveṇa sarvaṃ sarvathā vipramukṣāḥ / tathāgato jñāna-bala-vaiśārady'āveṅika-
buddha-dharma-samanvāgata rddhi-balenātibalavāmi loka-pitā mahopāya-kausalīya-jñāna-parama-pār-
amitā-prāpto mahā-kāruṇiko 'parikhīna-mānaso hitaisy anukampakāḥ / sa tṛaidhātuke mahatā duḥ-
kha-daurmanasya-skandhen 'ādīpta-jīrna-patala-śāraṇa-niveśana-sadrśa ulpadyate sattvānām jāti-

jarā-vyādhī-marāṇa-śoka-parideva-duḥkha-daurmanasyopāyāsāvidyā 'ndhakāra-tamas-timira-paṭala-
paryavaṇāha-pratiṣṭhānāṃ rāga-dveṣa-moha-parimocana-helor anuttarāyāṃ saṃyak-saṃbodhu samādā-
pāna-hetoh/ sa ulpannāḥ samānāḥ paśyati sat tvān dahyataḥ paçyamānāḥ tapyamānān pari tapyamānā-
ñ jāti-jarā-vyādhī-marāṇa-śoka-parideva-duḥkha-daurmanasyopāyāsaiḥ paribhogā-nimittaḥ ca kāma-
hetu-nidānaṃ cāneka-vidhāni duḥkhāni pratyanubhavanti/ drṣṭa-dhārmikāḥ ca paryeṣṭi-nidānaṃ pa-
ri-graha-nidānaṃ ca sāmparāyikāṃ naraka-tiryag-yoni-yama-lokeṣv aneka-vidhāni duḥkhāni pratyan-
ubhavisyanti / deva-manuṣya-dāridryam anīṣṭa-saṃyogam iṣṭa-vina-bhāvikaṇi ca duḥkhāni pratya-
nubhavanti / tattraiva ca duḥkha-skande parivartamānāḥ krīḍanti ramante paricārayanti notkrasa-
nti na saṃkrasanti na saṃkrāsam āpadyante na budhyante na cetayanti nodvijanti na nihsaraṇam
paryesante tattraiva e'ādīptāgāra-saḍṣe traidhātuke 'bhīramanti tena-tenaiva vidhāvanti / tena
ca mahatā duḥkha-skandenābhayahatā na duḥkha-manasikāra-saṃjñām ulpādayanti ||

「苦惱の塊」とは、苦しみの集積で、人間の個人存在を指し、後に「苦蘊」とも訳される。わたしが「悲哀」
「愁嘆」「苦惱」「憂愁」「惑乱」と訳したものを、妙本はまとめて「憂悲苦惱」とする。

※前号 九頁一四行 「歌人・大塚五朗」中の「ガンゲ」につき、柴野純孝氏が「大塚先生に関する文で雁木が
でて参りますが、小生の部落等でも昔は軒並にみられたものですが、最近殆どなくなりました、ガギ下という
言葉をよく聞き、口にもしたものです」(三月八日消印葉書)と示された。

ヤブツバキと平野神社

1960.3.10.

原 田 慶

三月六日は啓蟄だといので、タンポポの花の上で二匹のテントウムシが遊ぶところの写真が新聞に出ていた。場所は左京区の土手とある。ところが翌日は寒の戻りでまた冷え込み、八日の朝にはあたりが白くなって、粉雪が舞っていた。雪国ではない土地で雪を見るのはいかにも新鮮で心がはなやぐものである。八時を過ぎるころにはぼたん雪になり、降るそばからみんな溶けてゆく。窓から庭をのぞいていたら、雪の中に、ヤブツバキの赤がとくべつ美しく見えた。やっと二メートルほどに伸びた若い木だけけれど、知人から実生を五本もらったうちの二本が花をつけるようになった。近所に植木鉢のツバキを戸口に置いている家があって、これは二月の初めごろから花をつけている。大輪の五弁で、赤はすこし薄く、いっぱい花を開いてほとりと落ちる。なんという名前なのかしらないが、誇り高く、胸を張って咲いている。それだけに落ちた花を見ると、ああと思うが、たいていは家の人が気をつけてかたづけるので、花の数はへっても、落ちているのはあまり見ない。

ツバキは日本原産で、ヤブツバキがツバキ界の母種ともいうべきものだそうである。二変種あって、ユキツバキは寒い地方のもので樹高が低くよく分枝し、葉の組織がヤブツバキと異なっているという。他にこの二種の中間型がユキバツバキ、中国雲南省原産のものがトウツバキで、豪華な八重咲種の改良に用いられたという。ウラクツバキ、ワビスケなど出生不明のものもあるらしいが、現在ではどのくらいの品種があるのだろうか。ツバキの学名をカメラリア・ヤボニカというが、これはフィリッピンのルソン島植物誌を書いたカメルスという人

を記念してつけたもので、カメルス自身はツバキをみていないだろうと、春山行夫の『花ことば』という本に書いてあった。わたしの生れた家の庭に、白い八重咲きのツバキが咲いて、バラの花のようだったが、西洋ではツバキは「日本のバラ」と呼ばれ、「あなたは美しさのみで惹きつける」という花ことばがあるという。同じ家の生垣にヤブツバキがあつて、この葉を細く巻いて、端をすこし切り、くわえて吹くとピーと鳴った。バラのようなツバキの葉は丸く大きくて、ぼしぼししてうまく鳴らせなかった。そのせいか、バラのようなツバキにはあまり親しみを感じていなかったような気がする。

雪の中の赤い花を見ているうちに平野神社のヤブツバキを思い出した。七年くらい前のこと、通勤のバスの中から外を見ていたら、西大路の歩道一面に赤いツバキが落ちていた。雨の日だったから、その花を踏みながら傘をさした人が歩いていった。あの花を糸に通したら美しい花輪ができると想像することは、バスの中のひとときを楽しませてくれた。あのツバキもそろそろ咲き初めているのではないだろうか。花が咲き、雨が降り、強い風が吹くと赤いツバキが長い塀にそって、歩道いっぱいに落ちるだろう。その景色をバスの中からでなく直かに見たい。あの血のような赤を見ると、草や木がさまざまな色の花を咲かせることをあらためて不思議に思う。

ちようと平野神社の方角へ出かけることがあったので、すこし足を伸ばしてツバキを見にいった。東側正面の鳥居の方にはツバキはないが、北と西をとりまいている高い塀の中からは、何本もツバキの大木が葉を繁らせていて、小さな花がいっぱいいついている。やっと開いたばかりの花の鮮やかに赤い色が、口紅のように美しい。南側には広い桜の園があり、夜桜見物でもにぎわうが、それは江戸時代からのことらしい。社の説明によると、花

山天皇が寛和元年（九六）にお手植えされてから桜の名所となり、五百本余りで珍種が多いということである。これを囲む石垣の上にツバキが、カシやクスノキ、カナメモチなどの照葉樹に交じって八本あり、いっぱいにつばみをつけている。白くしっとりとした膚のツバキの幹は、陽あたりのよいせい太く、背も高く五メートルくらいあるように見える。濃い緑の葉をびっしりと山盛りにつけていて、その中に赤い花が下をむいて小さく咲いている。歩道一面に花が散っていたのは四月だったのだろうか。ツバキの茂みにひそんで花の蜜を吸っているヒヨドリは、人が近くで見上げていても逃げようともせず、あるじ顔をしている。いつもやかましく叫びたてて、せわしく飛ぶあのヒヨドリだとは思えないほどツバキの茂みに甘えている。

ツバキは長寿で高さ十数メートルになることもあり、三百年、四百年の樹齢をもつものもあるといわれる。濃い緑のなんとも形のよい葉にかくれるように咲く赤い花に、古代の人は神秘性を感じ、神聖な植物として扱ってきたという。邪気をはらい、百鬼を制するための卯杖にツバキも用いられ、正倉院にはツバキの卯杖が保管されているそうである。さまざまな花や、想像できるかぎりの色や形を見せられている現代のわたしたちも、この花の美しさには、はっとさせられる。

平野神社にこれほどヤブツバキがたくさんあるとは思っていなかったので、まわりを歩いてみて感心した。北野天満宮、つまり天神さんとほとんど隣りあい、学問の神さんがあまりにも賑わっているために、平野神社は桜の季節のほかは、際立ってひっそりしているように感じる。しかし、こちらも格式の高い由緒のある神社で、神階は正一位、賀茂、石清水、春日などと並ぶ大社だという。祭神は、今木（いまき）神、久度（くど）神、古開

(ふるあき)神、比咩(ひめ)神である。社殿が美しく、比翼春日造り、または平野造りといわれ、第一殿と第二殿をつないで左右に並べ、一棟の建物にしている。それが二棟あり、もう一棟、すこし小さな社があるのは、県(あがた)神社である。

この神々について、内藤虎次郎という人が大正八年に講演した記録の中に、比咩神は別として、他はみんな朝鮮のえらい王様だと書いてあるのを読んで、わたしは何とも不思議な気持がしたことがあった。

平野神社は、延暦年間(九世紀初頭)平安遷都に随って大和から遷座したもので、祭神は桓武天皇の祖先であるというらしい。桓武帝の母方は百済の王の末孫であり、今木神は、百済の聖明王であるという。久度神はやはり百済の王で仇首(くど)王、古開神は、百済の元祖の沸流(ふる)王と、古開の開は関で、やはり百済を起した尚古(しょうこ)王の二人だという。百科事典にも同じことが書かれ、この説はほとんど定着しているらしい。ただ事典には「しかし、一説には今木神はヤマトタケルノミコトで源氏の氏神、久度神は仲哀天皇で平氏の氏神、古開神は仁徳天皇で高階氏の氏神、比咩神はアマテラスオオミカミで大枝(大江)氏の氏神であるともいう。」とつけ加えられている。

わたしは社殿を拜してから、垣根でさえぎられている裏の方をのぞいてみた。シイの大木が茂り、サカキ、カナメモチ、カシ、アオキ、ツバキなどの下生えがいっぱいだった。西北の隅の方は竹やぶになっていてヤブツバキがたくさん混じっている。裏へは立ち入れないようにしてあるので、自然の姿が保たれているようである。

社務所に若い神官がおられたので、祭神のことを尋ねてみると、神社としてもよく調べ、今木神については別

の考えを持っておられるのだった。説明されたことをまとめると次のようなことになる。

今木神を今来（新来）の神、聖明王としたのは、江戸時代後期の国学者の伴（ばん）信友という人であるが、神社のほうでは、同時代の国学者の鈴木重胤（しげたね）が『延喜式祝詞講義』の中で、今木神は物部氏のゆかりの神であると言っていることに注目している。天孫本紀、神武天皇即位元年の条に、

宇摩志麻治命、五十櫛（いくし）マタ今木トイフヲ、布都主剣大神ニ刺シメグラシ、殿内ニ齋キ奉ル。

とあるのを、重胤は「これぞ今木の神なる」といい、この神が物部氏ゆかりの、奈良県石上神社の祭神である布都主剣大神だとする。そして九世紀初の『新撰姓氏録』山城国神別には、今木連（イマキノムラジ）カムニギハヤヒノミコト（物部氏の祖）七世孫とあり、先に出てきた宇摩志麻治命は、このニギハヤヒノミコトの子であって、天つ神の詔に従い、鎮魂（タマフリ、タマシズメ）の神業をもって、天皇の万歳を祈った。その時に用いた今木すなわち五十櫛とは、玉幣などを着ける料の櫛のこと。宇摩志麻治命がもっぱら今木の事に仕える職となったので、今木氏と呼ばれ、もとは物部氏の一族である。結論として、平野神社の主神である今木神は、新来の神ではなく、天皇のタマフリ、タマシズメを祈った石上神宮の布都主剣大神ではないかと考えられる。

なおまだ一つ考察が加えられていて、石上神宮を京都に遷すことを桓武天皇が命じられて、延暦二十四年二月に山城国葛野郡に倉を建て神宝を運んだが、倉が倒れ、天皇が病気になる。そこで女巫の神託をきくと、石上大神の祟りだということで、勅使をたてて、奈良の石上神宮社頭で天皇の鎮魂を祈り、神宝をもとに返したが、甲斐なく桓武天皇は崩じた。そのとき葛野郡に倉を建てた地が、この平野神社であったろうというのである。

神官からずいぶんくわしい説明を聞き、印刷物もいただいた。わたしなどは、これらの文書を読み取ることは

なんとかできるのだけれど、じぶんに知識や考え方の基本がないから、どれもこれも、なるほどおもしろいなあとか、なんでやる、という程度の感想しかない。どこに矛盾があるのか、大きな疑問を含んでいるのかなどは、まったく考えもつかない。神武天皇即位元年などというところ、それを史実として扱うものなのだろうかと思ったりするが、そんなことは現代人のなまいきさにすぎない。

平野神社の方が、これほど熱心に調べ、印刷物まで作っておられるのは、むしろ在日朝鮮人の問いに答える必要からということらしい。わたしたちはのん気だから、どのような神様がおまつりしてあるのかなどは気にかけていない。すこし気にかける人があるとすれば、ご利益くらいのこと、平野神社は、染色手芸、衣の守護神、かまどの神さん、火の神さん、ということなので、わずかに一円や十円のお賽銭を投げて、火災を逃れ、家内安全、家業繁盛を願う。

しかしもう一度考えてみると、それでよいのかもしれないという気もする。ただうろろと眺め歩いているうちに、神の前に立った時、ふと自分を振り返ることができれば、それが神の力である。わたしたちが畏れの気持ちを失わないために、また祖先が生きてきた遠い道筋を忘れないために、説明することのできない大きな力の働きがなければならぬ。どんなに時代が変わってもつやつやと美しい緑の葉蔭に咲く、赤いツバキにおどろき感動するわたしたちの魂は変わらない。

平野神社の祭神がだれであっても、そこに神社があることが大切なのである。これからずっと毎年、ヤブツバキの赤い花が咲き、道いっぱいその赤を散り敷いてくれる日があるなら、ほかに何をいうことがあろうか。

中国の詩人と仏教 (四)

1960. 3. 29.

原田憲雄

六、三言・五言・六言・七言の偈

後漢の末にちかい一六七年に大月氏の支婁迦讖(しるかせん)が中国の都の洛陽にやってきて、一七八年ごろから十年ほどの間に『道行般若(どうぎょうはん)にや)経』、『首楞嚴(しゅりょうごん)経』、『般舟三昧(はんじゆざんまい)経』、『阿闍世王(あじゃせおう)経』などを訳した。というところまで前回でお話ししました。

その前に述べた安世高は小乗のピクで、訳したものはみな小乗の經典でしたが、支婁迦讖は大乗の坊さんで、訳したのもすべて大乗の經典でした。キリスト教でなら、カトリックの 아우グスチヌスの『告白』と、プロテスタントのルーテルの『キリスト者の自由』を同時に与えられたようなものです。これは後にだんだん問題とされるようになりませんが、当時の中国の人たちには分かりませんでした。いずれも釈尊の教えとして素直に受け取ったのです。安世高の訳した經典は、呼吸法とか、教義の入門書のようなものでしたが、支婁迦讖の訳したものは、般若・華嚴・浄土系の、大乗でももっとも高度の教えを記した經典で、中国の知識人にだってすら理解できたとはいえません。しかし經典は、哲学書とちがって、むつかしいところもあれば、やさしく、おもしろいところもあり、読めない人にも坊さんたちが、譬喩などを混ぜて説き聞かすのですから、ぼつぼつではあっても、確實に人々に伝わってゆきます。

『道行般若経』の「功德品第三」には、男でも女でも、般若波羅蜜を学び、行じ、あるいは般若経を受持し、書写し、諷誦(ふじゆ)し、七宝の塔を建てて安置し、香華・幢幡などを供えるならば、災害を受けることなく、

福德は極まらないだろう、と説かれています。

古い時代の中国では、治者階級の知識人と治められる庶民とのあいだの知識の交流は、全く断絶していて、知識人はその知識を、庶民に伝えようとはしませんでした。だから「仁」とか「義」とかいつても、知識人のあいだでのエチケツトみたいなもので、人間全体の問題とはされなかったのです。儒教の經典は、だから知識人だけのもので、かれらが庶民を治めるための規則書・手引き書なのです。庶民に知られないほうがよく、従って庶民に教えようとはしませんでした。儒教の經典は、庶民には関わりのないもの、まして読んだり、誦（うた）ったり、誦（とな）えたりするものではありません。ところが仏教の經典は、たとえ内容が理解できなくても、持ち、写し、誦い、誦えるだけでも、それが尊い行として讃えられるのです。能力の高い強者には限りなく厳しい学行を求め、能力の低い弱者には限りなく易しく楽しい救いに導く、というのが大乘仏教の目指すところだからです。

さて、支婁迦讖の訳した『般舟三昧經』には、一卷八品のもの、三卷十八品のもの、二本あり、そのどちらが本当に支婁迦讖の訳かということにつき、学者の間で説が分かれ、未だに決着していません。しかしこれからわたしのいうことは、どちらにも当てはまることです。ここでは一卷本から例をあげることになります。

この經典は、散文の間に韻文がはさまれています。つまり散文と韻文とを組み合わせて、この經典の全体が構成されているのです。仏教の經典では、それが普通なのですが、中国人が知った仏教經典では、これが初めてでした。そして中国のこのころまでの書物としても、こういう構成のものはいへん珍らしかったのです。

さらに、その韻文は、

立一念 信是法 隨所聞 念其方 ……

といった、初めから終りまで三言の句を連ねた偈があり、

心者不自知 有心不見心 心起想則癡 無心是涅槃 ……

のような五言の偈があり、

常信樂於仏法 精進行解深慧 広分布為人説 慎無得貪供養 ……

のような六言の偈があり、

若有菩薩求衆徳 当説奉行是三昧 信樂諷誦不疑者 其功德福無齊限 ……

といった七言の偈があるので、

支婁迦讖は、これらの經典を訳したことのほかは、ほとんど何も知られていません。かれも語学の天才だったので、きわめて珍しい部類に属したのです。かれの協力者は、その珍しい文体をインドの經典の翻譯にすらすらつかしいものです。たぶん、かれを信じた中央アジア出身の中国帰化人や、中国の知識人が、かれの翻譯に協力したのでしょう。それにしても当時の中国の詩は五言のものが普通で、三言・六言・七言のものは、無いではないが、きわめて珍しい部類に属したのです。かれの協力者は、その珍しい文体をインドの經典の翻譯にすらすら使っているのですから、名は残っていませんが、相当な言葉の使い手、つまりは詩人だった、ということになるでしょう。中国の詩では、脚韻を重んじます、インドの詩が音数律であるところから、脚韻を放棄して、最初から音数律一本で偈を訳しているところも、大した見識です。これらにつき、次回にさらにお話ししましょう。

※本号 印刷不鮮明箇所 二頁一一行 (続風土二四二六) 九頁一行 (岩波本 四一六頁)